
「ちせ」先輩になりかけた"僕"

望月陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ちせ」先輩になりかけた”僕”

【Nコード】

N1333A

【作者名】

望月陽

【あらすじ】

最終兵器彼女のちせと後輩のストーリー。

ちせ先輩はかわいい。天然なところがすごい。

一度だけ、何かの係で一緒になった事があった。きっとその時からだと思う。”僕”はちせ先輩を目で追っていた。

僕は今、病院で検査を受けている。年度始めの内科検診にひっかかってしまった。理由はまだよく分からない。

ちょうど今、最後の検査を終えて点滴を受け始めた。

―普通、検査の後に点滴を打つものなのか？僕は初めての検査に不安たらたただけのだろうか―

そんな事を考えていると…

「おう優か？お前も内科検診に引っ掛かったか？？珍しいな」お前みたいな奴がひっかかるなんて」

と、僕に話しかけてきたのは幼馴染みの直だった。

「僕だってたまにはこんな事あるさ。お前こそ何回検査にひっかれば気がすむんだよ」

「今回で八回目」

「はあ、どうせ今回も異常なしって言われるんじゃないの？」

「分かりませんよあ、そんな事」

「お前絶対検査楽しみになってるだろ…なあそれより、普通って検査の後に点滴を打つのか？」

「そう言われてみればあんまりあんまりないな…まあいいんじゃない？検査って疲れるから」

「それもそうだよな…ははっ」

僕は初めての検査で疲れたのかいつの間にか眠ってしまった。

―うーん―

……！！

ここ一体どこお！？僕はさっきまで点滴を病院で…

―周りをキョロキョロと見回してみると、僕と同じぐらいの年頃の女の子が同じように点滴を受けながら眠っていた。

そこにはさっきの直も眠っていた。

「ねえ直！早く逃げよう！ここ絶対おかしいよ！ねえ直つてば！！」僕は何度も直の肩にがんがん揺さぶりをかけながら言った。

それでも直は起きないので僕は急いで点滴針を抜いて一人で逃げて行こうとした。

―っ…痛ったあ…―

無理に点滴針を抜いたせいかすごく痛い。今まで受けた注射の後よりも出血していた。

止血をしつつもう一度周りを見てみた。ここはまるでホラーゲームの舞台になりそうな古い木造の病室だった。

部屋は担架に載せられた同じ年頃の女の子ばかりでその中に一人だけ男の直。

―何で直以外は女の子なんだ？―

そのとき誰かの話声が聞こえてきた。

「今回は『ちせ』二号機の良い候補は見付かりましたかな？」

スーツ姿の男が白衣姿の男に訪ねた。

「今回は見付かりそうですね。手回しありがとうございます。」

―何っ！『ちせ』二号機！？ってかちせ先輩が一体なに？ありえないからそんな事…―

「あれぐらい大したことじゃないですよ。この地域の特性を利用したまでのことです。」

「特性といいますと？」

「君だつて知っているはずでしょう？この町は自衛隊で成り立っているということぐらい。この町の高校生は自衛隊入隊希望者が多いのです。まあ我々としては君のような優秀なキャリアが欲しいのですが。歩兵確保とやらで…。我々が高校生を採用しないという話を学校にちらつかせておけば、学校はおとなしく動いてくれますから

ね。」

「なるほど。でも本当に助かりました。スポーツテストの結果も頂けたので。『ちせ』二号機は『ちせ』より基礎運動能力を高くして即戦力になる方がいいかと思ひまして。」

「ありがたい。それで候補は？」

「はい。こちらの資料に載っている、有田 優と坂本 直の二人です。」

「えっ！僕と直かよ…なんで？」

「ほう…スポーツテストA判定。それもほとんどが10点満点。陸上部所属。インターハイ出場経験ありですか。なかなか良いですね…。」

「本人達を連れてきています。こちらです。」

「来んなよ。ってか勝手に兵器にしようとするなよ。――

その時ガラツと部屋のドアが開いた。

「おやあ一人いませんねえ。逃げ出そうとしたの…うっ」
ドサッ

「どうしましたかあ、」

ドサッ

「悪いな。スーツと白衣のおっさんよお。俺と直は柔道と空手の黒帯だ。これは俺が直より勝ってるのさ。」

僕はおっさん達を気絶させている間に逃げた。夢中で走り続けた。そして途中である部屋を見つけた。

【関係者以外立ち入り禁止】

――まさか『ちせ』先輩がいたりしないよね――

廃病棟にありがちな看板のドアを開けるとそこには、背中から鉄の羽根を生やしたちせ先輩がいた。

「ち…せ…先輩…？」

当然、僕は自分の目を疑った。しかし目をこすって見ても、まばたきして見ても、目に映るちせ先輩の姿は変わらない…。

小さな背中から突き破って出てきた様な鉄の羽根、絡み付いている
何本何十本ものコード……

―この……ちせ先輩が……『ちせ』なのか……？……何？―

いつのまにか、さっきのスーツと白衣姿の男が私の後ろにいた。今
度は仲間を引き連れて。

はつとして時計を見てみると、思っていたよりも時間が過ぎていた。
やることは決まっている。もう一度奴らの意識をとばせばいいだ
けのことだ。

―あ……あれ……動かない……ああ……―

なぜかまぶたが、だんだんと重たくなっていた。目を開けようと
しても、体が妙に気だるくて動かなかった。

いや、動けなかった。薄れてゆく意識のなかで誰かが話をしている
声が聞こえたような気がした……

―……うーん……あつ――

目を覚ますと検査を受けている病院。しかも点滴を受けていた場所
だった。

それから間もなくして、名前を呼ばれたので診療室に入って検査結
果を聞いた。もちろん異状なしだった。

「よかったねー 一体何で検査で異状ありって言われたんだろうねえ。
校医はヤブだったのかねえ？」

と初老の優しそうな医師が言つと、さっき僕を呼んだ若い看護師も
一緒に、よかったねーと言った。

―それ、こつちが聞きたいんですけど。『ちせ』先輩二号（？）候補
で集められただけだから、なくて当然なのにな……―

この二人はあのことを知ってるのかそれが気になって仕方なかった。
「ああ！もうすぐ外来は終わるから早く家に帰んなさい。明日は学
校なんだろう？」

「あつハイ。ありがとうございます。」

―すぐタイミングよく先に言われちったなあ――

病院から帰る途中で、荷物を持った直の母さんに会った。どうも直

は検査入院になったらしい。

そういえば、点滴で眠らされてから直の姿を見ていなかった。
僕は直の母さんの荷物を運ぶ手伝いをして直の病室に入った。

- 続く -

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1333a/>

「ちせ」先輩になりかけた"僕";

2010年10月14日13時50分発行